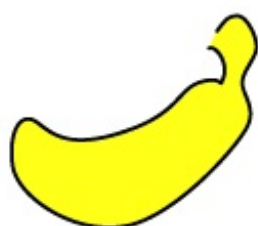
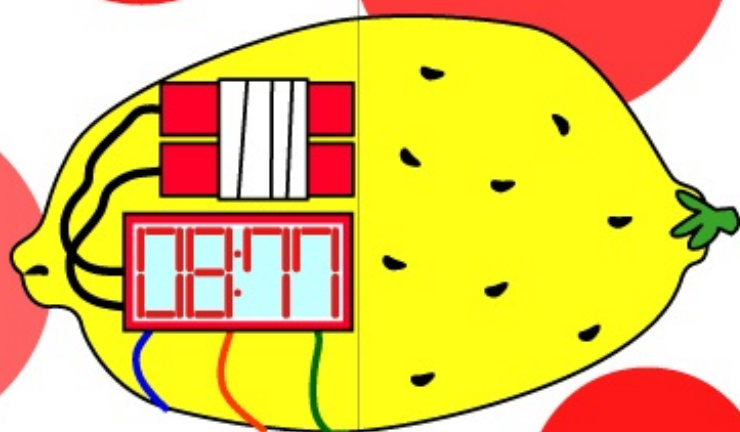


梶井基次郎 原作

『檸檬』

より



SARUBACC A

文学

×

ぴよん太堂。

筆



盤が廻る。

エリック・サティの盤だ。

頭の中で盤が廻る。

曲は……、

グノシエンヌ、か。



盤が廻る。

盤が

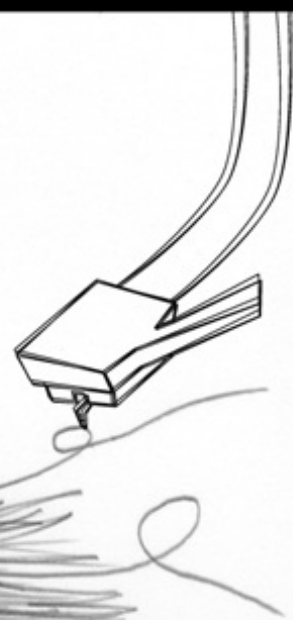
廻る。

頭の中、で

廻る。

盤、

が



板塀のウロ

落書きのあと

メリメリと

硬い鋼鉄棒でも

メリメリと



破壊したく
なる、
無性にただ、

メリメリと
引き裂いて

しま、こくまる



鬱屈している
自覚は、ある

日常ではない、と

明らかに

これは自分の日常では

ない

と明確に、

自覚だけは

ある



ふらりと光景に

出くわす。廃品回収業者

が

バナナの皮を、積む、

運び去る。

ゴミ山と化して鼻を突く

バナ皮でさえ

こうしてまた

服だの紙だの葉だのへと

生まれ変わってゆく。

バナ皮でさえも

必要とされている。

新しい居場所を得る。

そんなことを想う。



バナ皮でさえも
新たな居場所
得る



かきむしると
手に残る
毛の束

爪の間の
妙な匂い





実感と

非実感と

実在感と

非実在感と

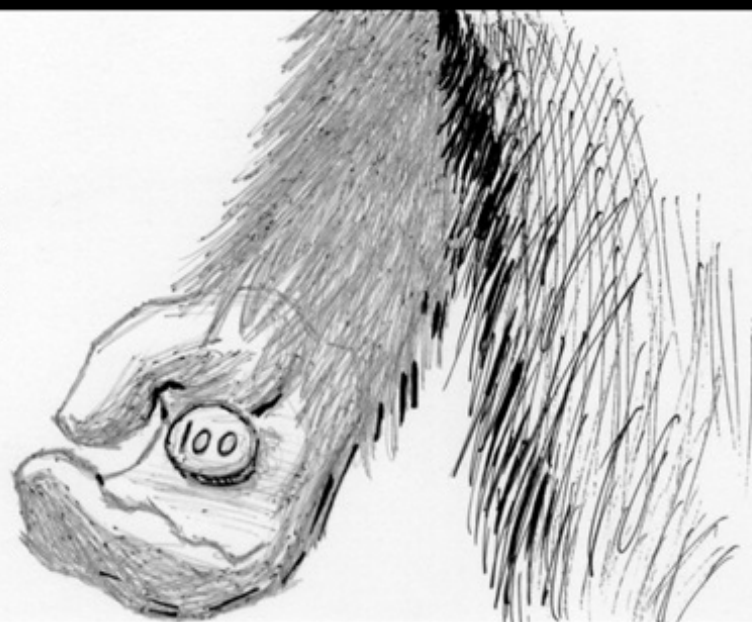
感触と

非感触と

此処なのか
其処なのか

手の中には

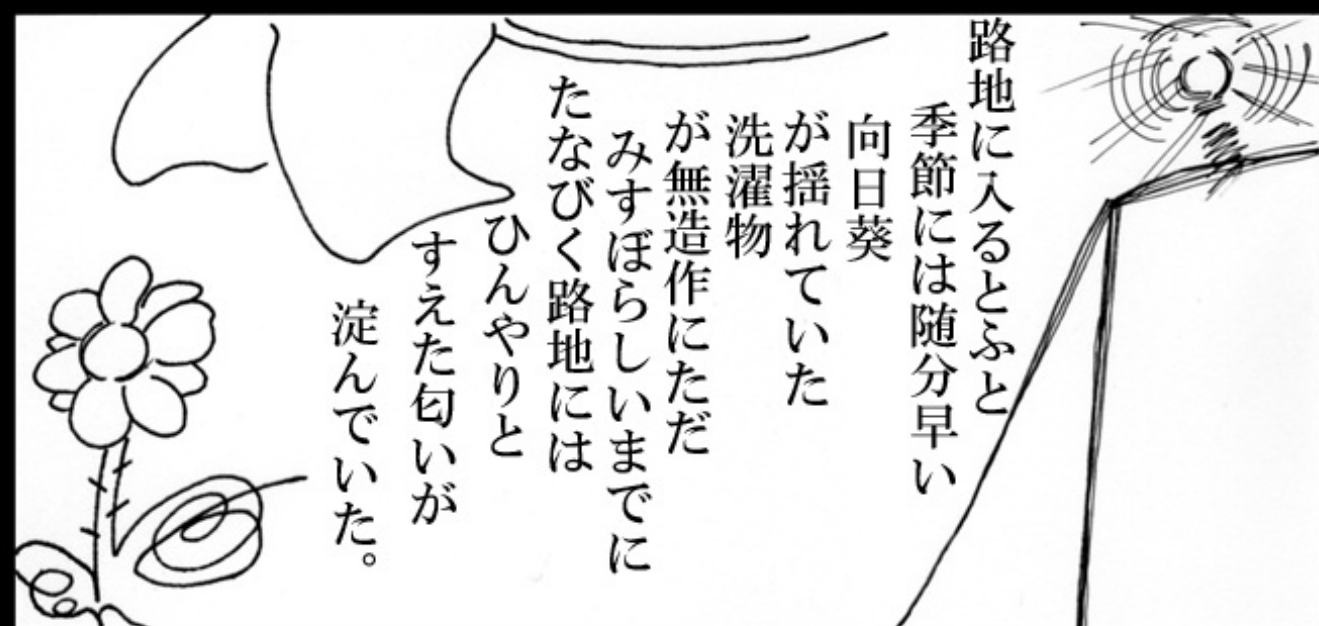
百円玉が一つつきり。



さては是れが
貧困かと思ふ。



何がそんなに
可笑しいのか



路地に入るとふと
季節には随分早い
向日葵
が揺れていた
洗濯物
が無造作にただ
みすぼらしいまでに
たなびく路地には
ひんやりと
すえた匂いが
淀んでいた。



爪の匂いが
路地のすえた
匂いと溶け合ふ

平素なら避けて通る
そんな路地の空気が
今の自分には
ひどく心地良かった、



私はまた
京都の布団のことを
ふと
想ふ。京都の宿の
ふんわりとした
匂ひのする
あの独特の幸福感に
包まれるあの
匂いのする
京都の宿の布団のこと
などをふと
想い浮かべてみたり
する。





私はまた

花火

といふものも好きに

なった

ひんやり心地良い

ガラス玩具

が散り散りったごとき

夜空の大輪も良い

が

私はあの

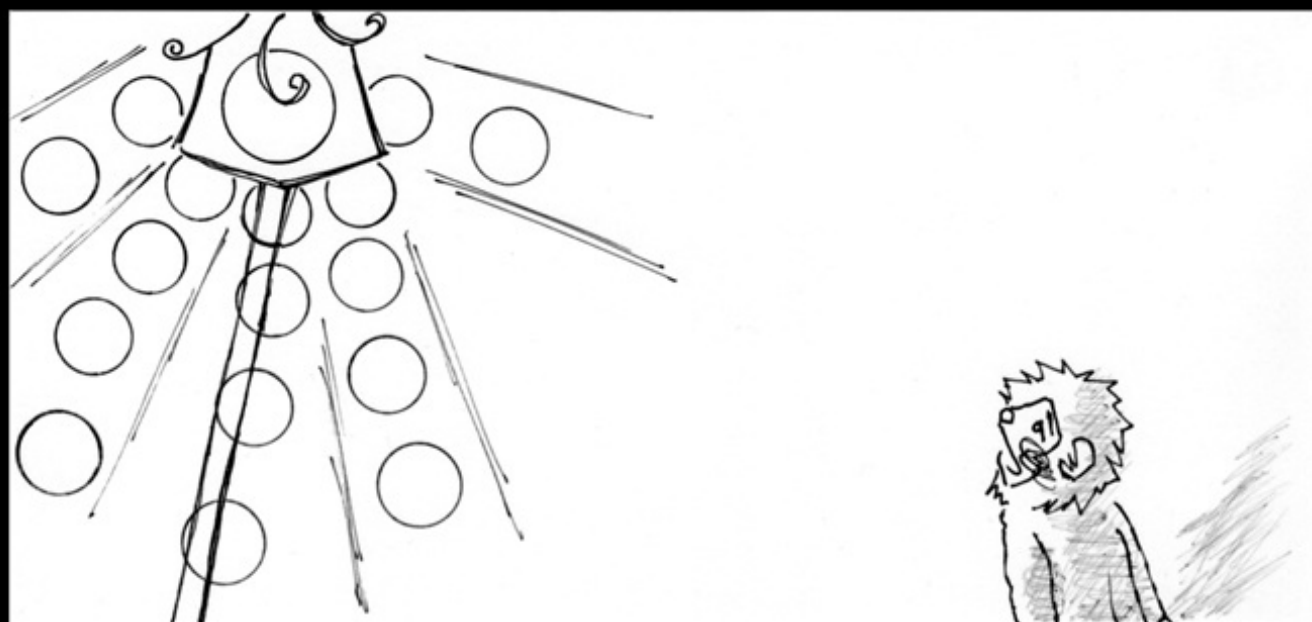
鼠花火

といふやつが何故だか

とてもとても

愛おしく

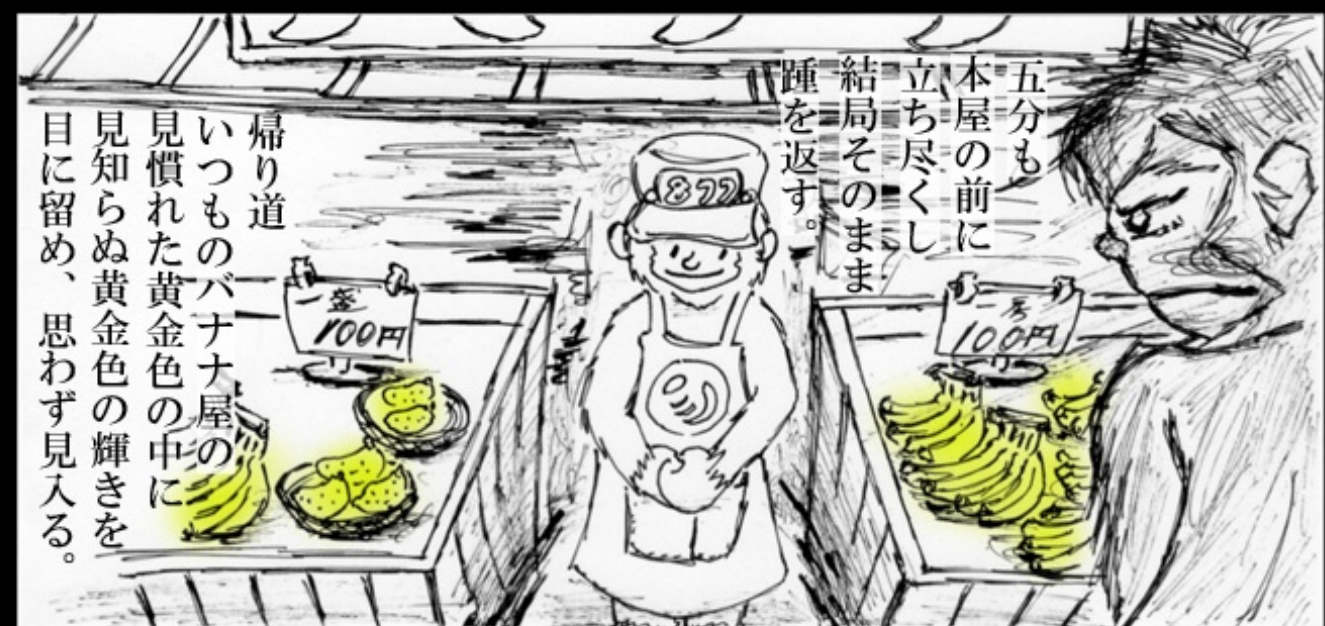
感じたりもする。





本屋の前に立つ。
ふらふらと彷徨い歩き、
いつやら本屋の前に立つ。

文庫一冊とて
買えぬものと
判っているが。



五分も
本屋の前に
立ち尽くし
結局そのまま
踵を返す。

帰り道
いつものバナナ屋の
見慣れた黄金色の中に
見知らぬ黄金色の輝きを
目に留め、思わず見入る。



檸檬ですよ、
と店主は云ふ。
形がアレなんで、
つつい仕入れちまって、と。

なるほど是れは
猿にはたまらぬ形
をしている。
手を伸ばさずには
居られない。

私はふと。

この瑞々しい果実
が

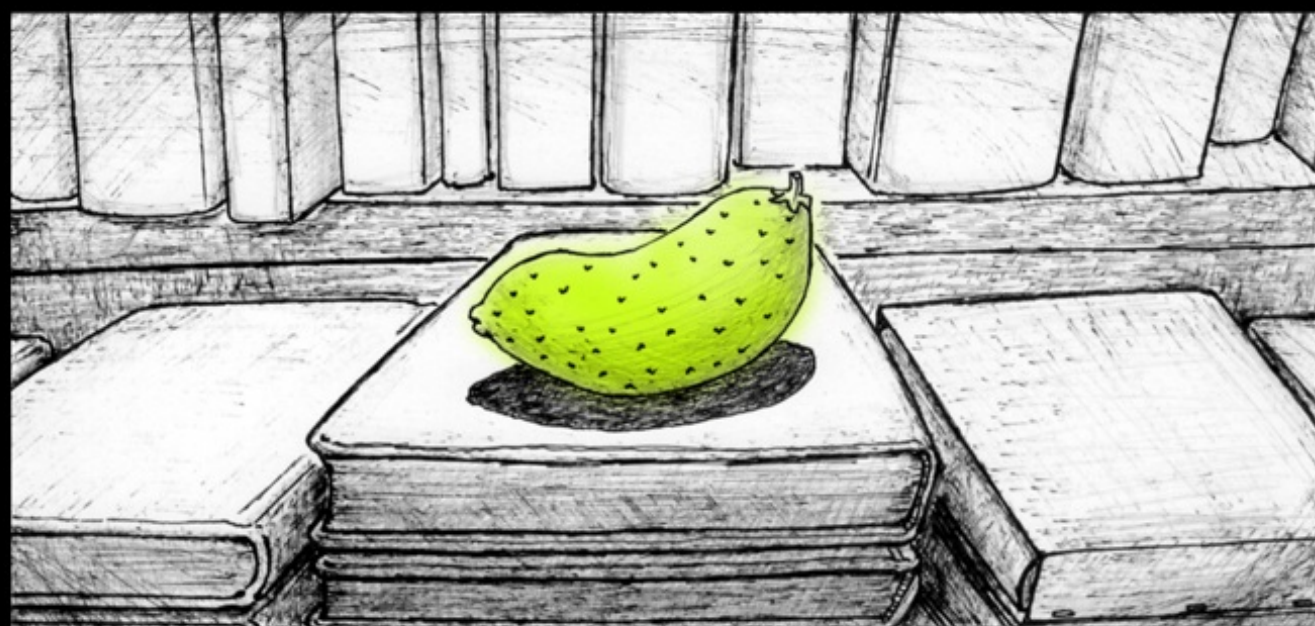
先程の本屋
に

さりげにぽつねんと
しかし見過ごせない
存在主張を放って

そつと本屋に

置かれてあるのだと

想像する。



平積みにした

本の上

そうだ、

大判の画集

なんかが良い、

表紙も厚い

装丁も豪華な

分厚い重たい

画集

に

檸檬

は良く映える。



疑いもなく 手に取り
気取った 見た目のままに
気取って 皮を剥き
かじりつく。



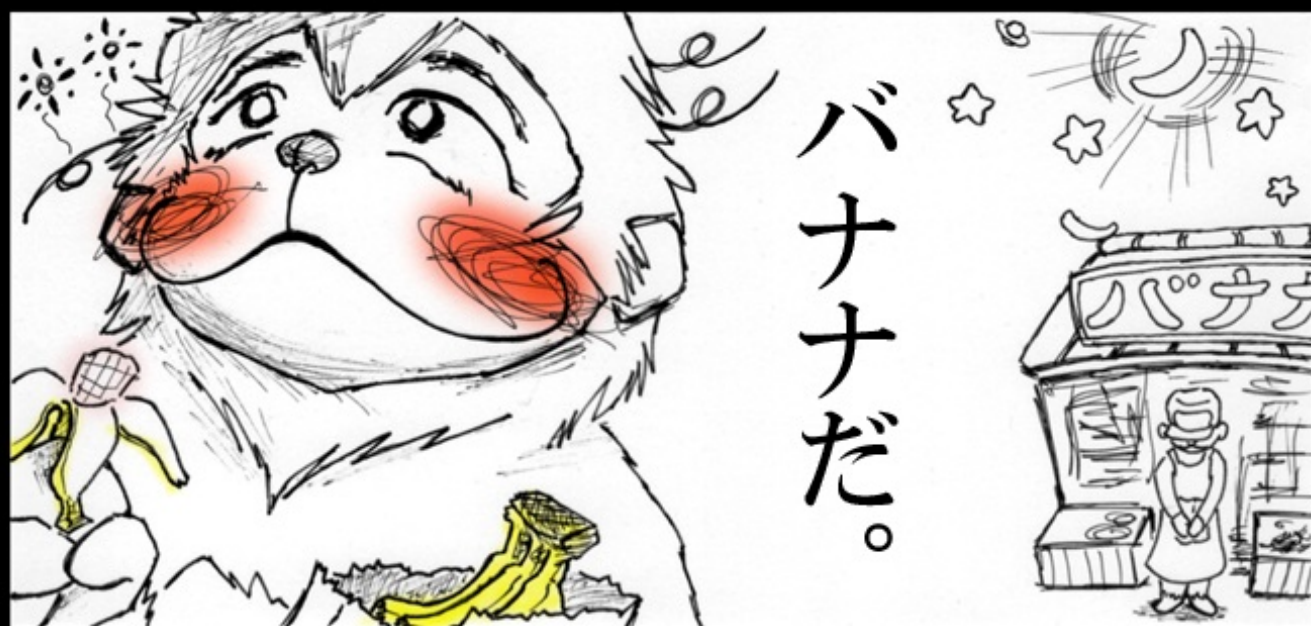
ああ何とゆう
画期的な爆弾だろう。

私は
なけなしの
小銭
を

差し出す。

買うのは当然。



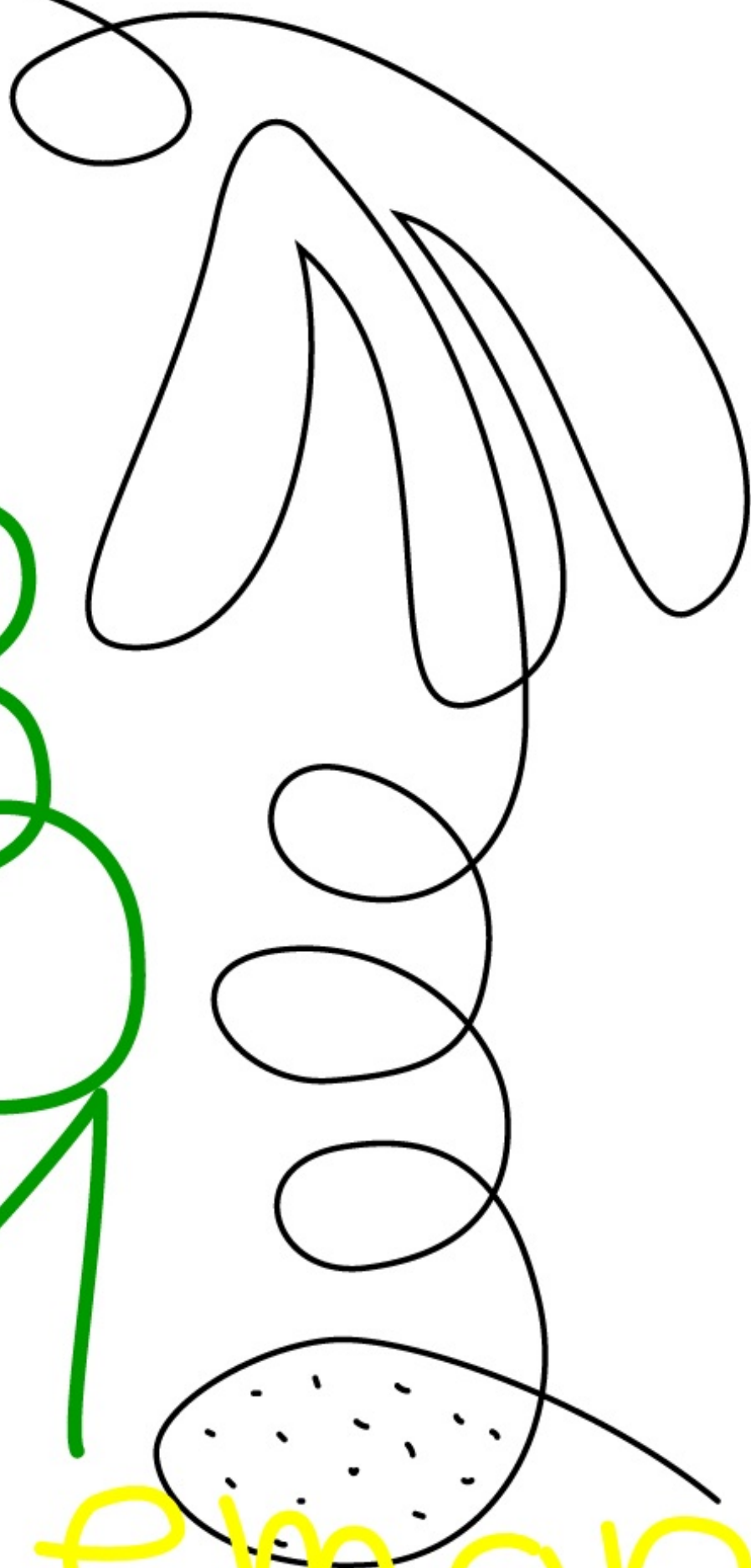


『檸檬』

了

BOOM

Lemon





2011年 “ラビット・イヤー” 4月制作作品

 卯乃京都亭書房。

梶井基次郎原作『檸檬』×S A R U B A C C A !

<http://p.booklog.jp/book/24769>

著者：ぴょん太堂。

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/pyonta-do/profile>

発行所：ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24769>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24769>